

芸 資料複製叢書第四集

圓朝全集

月報 12



世界文庫

近代文芸・資料複刻叢書第四集
昭和三十九年五月十日発行

定本 圓朝全集
（卷の十二）

全十四卷

限定版 五五〇部 定価千弍百四十二圓

校訂編纂者
圓朝會代表者

鈴木 行三

発行者 松本 富夫

版	定	限	
			第

発行所

株式
会社

世界文庫

東京都目黒区原町一、三五五番地

電話 東京七二三局九二四四（代表）
振替 東京七八四九八番

資料蒐集の回顧

斎藤 昌三

明治の文章体を改革したのは、山田美妙と長谷川二葉亭ということになっているが、その動機となったものは円朝の絶妙な話術を速記した読みものからである。

昭和初頭に当り、円本全集の流行をきわめた際、文芸家以外の全集として円朝が話題になった時、一部には完了をあやぶまれたのだが、読者層の系統が全く異なるのと、内容の健全性で、第一回の配本と終末配本とに異動なく終始したことは、当時出版界の奇蹟とされたのであった。

今、三十余年前を顧ると、編集の中心となった円朝会の鈴木行三老の熱意もさ

ることながら、この全集に収容すべき資料文献は、いづれも今日からは七八十年昔のものであり、それも半数以上は粗悪な洋紙に刷られた、ボール表紙や貸本本の位のザラ紙本で、既に巻頭の一枚がちぎれたり、最終頁が表紙と共に失われたり、同じものや異本やを二重三重に蒐集するの苦心があった。

この資料蒐集にはヒマにあかせて、東北地方から九州辺まで行脚もし、古い温泉町の貸本屋を探訪したりで、基本資料の大体揃ったところで当時の書誌「愛書趣味」で円朝特集号を出し、なお探求中の作品を更に天下に訴えるなど、藤の助手として僕には僕だけの苦勞をしたのだった。

、現在も存在するかどうか知らないが、本郷真砂町の裏町で、貸本屋として昔の

佛を残していた小店を訪ねて、明治初年からの手垢だらけの貸本を、一冊一冊はこりを叩きながら選り分けたり、仙台では佐藤とかいう古本屋で、天井下に積込んだ時代おくれのボール表紙本を一つと山ずつおろして、「あつたあつた」と内心に凱歌をあげて掘出したこともあつたがいざ値づけとなつたら、その主婦は珍本でも探して当てられたものと見てとつたものか、主人不在で売価は不明だと、取引きを謝絶された時には、全く開いた口が閉らず、わざわざ東京から来てはこりまみれになった一日が口惜しく、値段はそちらの望みのまゝでいゝと言つても、不在を口実にした頑迷さに、全然とりつく島もない態で、うしろ髪を引かれながら戻つて来た失敗もあつた。

然し、大体この時のボール表紙ものは異本と認められたものが多く、後ではあきらめもついたが、ただ不快なのは主人の不在という口実である。同業者からあらかじめ主人は五六年前に死亡し、未亡人が切りまわしているという事実を承知していたので、永久に帰る筈はないのに、腹の中で苦笑して帰つたのだつた。未亡人の強態には全くあきれかえらざるを得なかつた。

以上は遠征して成功した例と失敗した

一二の例であるが、さて資料個々についての苦心は又別の努力やら犠牲があったとにかく、和本の「牡丹灯籠」や「鏡か池操松影」や「塩原多助」の類は、広く読まれ重版もあっただけに、探求にはさして困難ではなかったが、最も苦勞したのは草双紙形のもので、たとえば明治四年に出た「菊もよう皿山奇談」の、合巻もの三冊本とか、同じ頃の「花菖蒲沢の紫」が、翌五年に「今朝の春三組盃」と改題して、三冊もので出ていた如き、初め下巻を発見しながら上巻中巻を欠いているとか、題名がまちまちで新発見と思うと、改題本であったというワケで、古本屋でもこんな端本は保存しておいてくれないために、なかなか完本として入手することは困難だった。その端本でもあれば結構として見当れば手に入れ、汚本でも重複でも円朝とさえあれば買入れることに努めたのだが、題名が解っていないなかなか探求出来ない作もあった。「月謡萩江一節」だったか「鶴殺疾刃庵丁」などだったと思うか、全集の進行中には出て来るという見通しで、発表も必ずしも年代順によっていないのは、そんな関係もあったと思う。

とにかくこうして集まった資料を、鈴木行三老は異本改作改題等について克明

に比較検討されたのち発表したのが、完本十三巻の「円朝全集」となって、完結を見たのが三十年前の昭和三年一月だった。題名は円朝作とあっても実は採菊山人（鈴木清方面伯の父）の原作だったリルビが現在と異なったり、この仕事は鈴木老でなくば完成しない難行であった。以上のような理由で、この全集は漱石や鏡花その他のように、必ずしも作の年次を追ってはいないが、また追う必要もないところに円朝の特色もあった筈であ

円朝の作品

正岡容

る。この全集のうち第八巻は発表だったか注意だったかがあったと思うが、それは「怪談乳房榎」の挿絵に、蚊帳の中の人物が描かれていたためで、今日から見たら全く噴飯ものである。

ちなみに、この難事業を遂行した鈴木翁は、なお健在で八十歳位と思うが、古鶴と号し、「近代作家大観」の労著があり、若い頃は「国歌大観」の編纂にも関係したことを附記しておく。

（筆者は書誌学者）

事にえがいてしまいが、こつちは大ぜいでやるんだから、なかには気の合わない役者もいて、到底高座でやるようなわけにはゆかないから」

「塩原多助一代記」は、明治九年（三十八才）から構想しだして、十一年（四十才）で完成している。二十四年（五十才）には明治天皇の御前講演をし、小学校の教科書にまで採上げられた。

五代目（先々代尾上菊五郎）が歌舞伎座で上演したのは二十五年（五十四才）であるが、そのとき菊五郎は、

「円朝さんは扇一本舌三寸、たったひとりで人物から景色まで、アリ／＼と見

と、はじめは上演を渋ったそうだが。たしかにそれはそうだろう、この間NHKの物語劇場で円朝物の劇化をきいて、ほぼそれに似た感じを私も抱かせられたから。円朝居士が、画壇の長老柴田是真（ぜしん）から江戸本所相生町の炭屋、塩原家の怪談をきいて一作しようとおもってしらべているうち、先祖の多助の立志美談の方に感激、越後伝吉や青砥（あおと）政談を巧くアレンジしてはじめては全く

別な物語ができた。怪談の方は門人の先代小円朝が金馬時代に、亡師のメモから長編に創作して口演しているが、多助を信用して証文なしでお金を預けていた出入りの者が、多助の死後、二代目と番頭が悪い奴でその金を取上げてしまうので怨んで身を投げて死んでしまう。その屍骸が堅川にそった多助の家の棧橋（さんばし）へ流れ着いてはなれない。奉公人たちが棒や手かきで屍骸を遠くへやろうとすると川へ落ちて死んだり、気が狂ってしまったりする。二代目も狂死、これが評判になって、さしも一代で築き上げた塩原の家が没落するというスジで、落語の「もう半分」に似ている。

しかし今日、上州下新田（しもしんでん）には塩原多助公園があり、大きな二階建ての塩原の家のこり、その二階はおかいこを飼っているらしく、いかにも上州の家らしい。程かい多助一家の墓のなかに山口屋と台石にきざんだのがあった。円朝はこれからおもいついて、わかき日の多助を吉原の山口屋へ、越後伝吉の三浦屋のよう、奉公させたのになにない。

円朝が執筆する前、奥日光から沼田へ、さらに下新田へ、実地に歩いて、殊に奥日光ではうわばみや猪や熊がでるときいて

も「何業も命がけなり」と決意、山越しをするこの旅日記は、岡本綺堂をしてとごとく敬服させており、「円朝全集」第十一巻におさめられて、明治九年八月末からの旅であるが、その後も幾度かいったらしく、全集にない旅行記では門人の円花とおもむいた「下新田日記」が明治二十六年（五十五才）にある。

雑誌「演芸世界」に発表されたもので、初遊から十七年めの旅だけに、昔は風呂場の板の間がヌラ／＼でひっくり返った沼田の大竹屋がすっかりキレイになったり、人力車で泊りを重ねていった上州へ今度は汽車ですぐに行けたり、ましてや菊五郎上演の翌年だから、円朝自身もこの創作のおもいでに感慨無量、多感な彼は上州の山河に、錦をかざって故郷へかえる多助同様、しば／＼涙を流したにちがいない。

「塩原多助」全篇の眼目（がんもく）「ヤマバ」例の愛馬の青の別れについて、私の亡師父三世三遊亭円馬（先代）は、多助は馬の顔をみながら別れの言葉を述べてはいけない、多助の手の甲へポトリと馬の涙が落ちるのはじめておどろき感激して、

「ヤーわりやア泣いてくれたかアア」と馬の首ツ玉へしがみつくと、よくい

った。馬の顔をみないというのは、言葉の分るはずのない畜生に多助は、せめてものグチをいつているのだからで、だからこそ馬が泣いたと分ってからの感激も一そう大きいわけなのである。

「丹精こめての我が作を、忘我の境に話す真情、円朝自身も泣くかと思える哀れさは、男女老若、ひとしく涙をもよおして、声を忍べる満場のすより泣き（中略）彼が芸の力は全くおそろしいものであった」

と岡鬼太郎は馬の別れをこうほめているが、著作権の「アファ」だったところ、誰も彼もが本をよんでそっくりそのまゝ口演したら自分の弟子たちが可哀想だと速記の青の別れだけは、わざと高座とはちがった演出をとっているのだ、ということもきいている。

いま亀戸天神境内に多助奉納の石燈籠が社前に一基だけのこり、一基は戦災でくだかれて、その脇にころがつている。

「天明元年辛丑八月十七日

本所相生町住 塩原太助」

ときざんであるから、参詣のお方はみてほしい。

相生町とは両国橋を東へわたって、緑町の交差点へかゝる少し手前の南側で、この電車通りの警察を、相生警察と戦前

はよんでいた。

「鏡力池操松影」（かがみがいけみさおのまつかげ）は江島屋怪談で、明治二年（三十一年）ころの作らしい。自分の昔の恋人お里の父倉岡元庵の名をもじって倉岡元仲といふかたき役にしたり、悲劇の娘をお里となぜたりしている。美貌の田舎娘が婚礼の晴着を、江戸の古着屋でのり細工のまやかしいものとしらないで求め、そのため当日夕立にあつて着物はばらばらにはがれてしまう。大恥をかいたので、投身自殺をするところから怪談となるのであるが、物語としてまた話術としての面白さも、前半の怪談にあるとしていい。私は旧著「円朝」の附録の研究篇で、慈悲深い江島屋の主人がなぜそんな不正な古着を売ったのかと聞いたところ、そのころの古着屋の多くがやっていたのだから、江島屋としてそう良心にはとがめなかつたらうと投書が来た。

成程、「文芸倶楽部」の「不正古着商」（大道子——明治廿六年一月号）をみると、彼らには羽織師、長物（ながもの）師、はりものや、おこないやなどの区別があつて、天下御免にちかいかイカサマ古着屋が明治中世まで横行していたということが分る。殊にはりものやのくだりで

は、

「江島屋騒動の振袖のような代物はな」とさえハツキリかいている。

尙、最後に仇討になる鏡力池は、円朝は浅草石浜（はなざさいし）にありといひ、「隅田川叢誌（そうし）」は橋場総泉寺前あさじが原とされている。梅若丸の母花子が、わが子の死を悲しんで身を投げた池で、飛ぶ蛙 鏡の池を曇らせるの川柳もある。

「松の操美人の生埋」（まつのみさおびじんのいきうめ）は、明治十九年（四十八年）やまと新聞へ発表。福地桜痴（ふくちおうち）——幕臣で新聞人で政治家で小説戯曲をよくした）に書いた外国小説の翻案（ほんあん）であるが、「美人の生埋」というタイトルはいかにも西洋人情ばなしらしくて、文明開化のお客たちをワットとうならせたにちがいない。

円朝は相州浦賀辺の物語にしているが主人公の石井山三郎が馬術の達人で馬のことをいろ／＼いうので、てつきり円朝も馬へのれるとおもひ、その後はこの馬へのつてすぐ来てくれと馬をよこす家などあつて随分困つたという。けだし、そのころ名人とよばれた馬術家草刈庄五郎におそわつた、円朝は問學問（きまがく）

もん）だったのである。

この「美人の生埋」を、田中英光が登場人物の名もそっくりそのまま、戦後の現代物にして発表している。短篇でいまちよつと題名は忘れた。

「円朝全集」を愛読してやまなかつたという太宰治の弟子らしい。

K.K. SEKAIBUNKO ■近刊予告■

世界文庫新書 4

甘辛エンマ帖

寺下辰夫 著

■その道の大家が採点した、全国味覚のエンマ帖。ほんものの「ヘアジ」はこの本からニジミでる。

■予価四九〇円

●以下続刊



英国孝子傳原本表紙

世界文庫

近代文芸・資料複刻叢書第5集 限定版

大杉榮全集

〈全十卷〉

編輯 近藤繁二・安成二郎

四六判上製箱入美本

価・各卷一、三五〇円下各二〇

毎月二十日刊 (月報つき)

■予約募集中!

★第一回 第五卷 「一革命家の思出」、青年に訴ふ、革命の研究
★第二回 第一卷 論文集 自由合意

★第三回 別冊〈第十卷〉 伊藤野枝全集

★第四回 第三卷 自叙伝、獄中記、日本脱出記、年表

★第五回 第二卷 論文集

★第六回 第七卷 男女関係の進化、人間の正体、物質非不滅論

★第七回 第八卷 種の起源

★第八回 第六卷 相互扶助論、民衆芸術論

★第九回 第九卷 昆虫記、科学の不思議

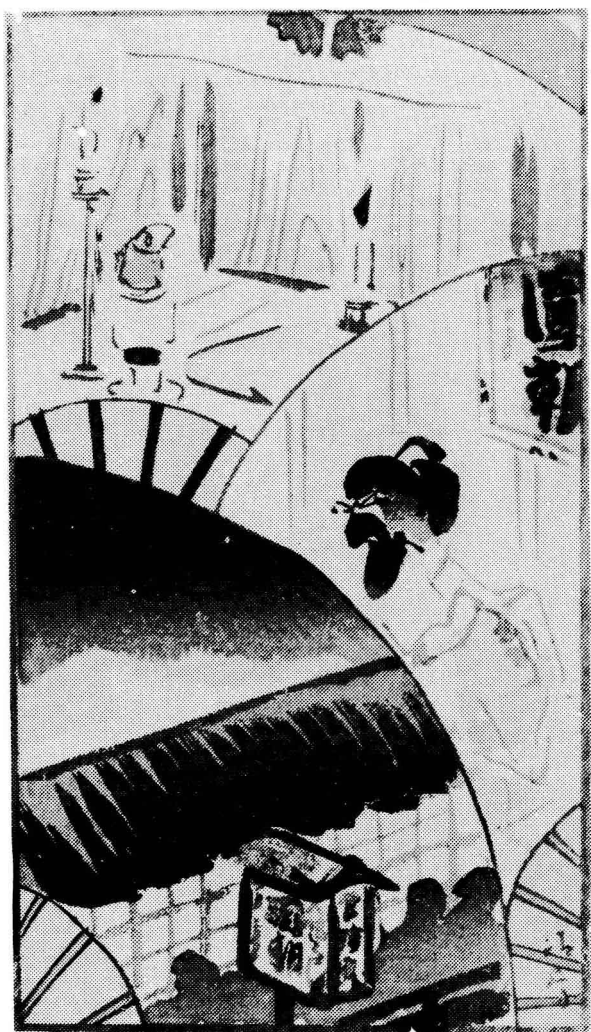
★第十回 第四卷 翻訳小説、隨筆、獄中消息、書簡集

★印は既刊

限定版の本全集は

予約申込み者に限り全巻配本いたします。申込みは
取扱の書店、若しくは弊社直接にお申込み下さい。

圓新全集



卷の二十



朝圓

歌の「舌無」



助多原塩の郎五菊上尾目代五

鹽原多助一代記

鹽原多助一代記は、是眞の話に端緒を得て想を構へ地理を調べて作り上げたもので、その詳細は本巻に掲げた日記其の他に明瞭であります。

嘗て明治天皇の天聽にも達し、小學校の教科書中にも編入されたことは人のよく知る所であります。單行本としては明治十七年に速記研究會から和装分冊にして出版されたのが初めてであります。

序詞
炭賣のおのが妻こそ黒からめと吟ぜし
秀句ならなくに黒き小袖に鉢巻や其助
六がせりふに云ふ遠くは八王寺の炭焼
賣炭の齒欠爺近くは山谷の梅干婆に至
る迄いぬる天保の頃まで茶呑しに
残したる炭賣多助が一代理記を拙作なが
ら枝炭の枝葉を添て脱稿しも、原來落語
なるを以て小説稗史に比較なば所謂雪

と炭俵辯舌は飾れど實の薄かるも御馴
染甲斐に打寄る冠詞の前席からギッシ
リ詰る大入は誠に僥倖當り炭俵の縁語
に評さへ宜を例の若林先生が火鉢にあ
らぬ得意の速記に。演舌るが儘を書取ら
れしが寫るに速きは消炭も三舍を避る
出來榮に忽ち一部の子となりぬ。抑こ
の話説の初集二集は土竈のハットせし
事もなく起炭の賑やかなる場とてもあ